

高校生の友人関係の特徴とアイデンティティ発達との関連

人間発達教育専攻

教育コミュニケーションコース

M14013A

藤井三和子

問題の所在と本研究の目的

友人とは、関わりの持続する同年齢の他者であり、青年期の友人関係では、内面的な深いつながりによって結ばれた“親友”との関係が築かれることが特徴である(中間、2014)。その友人関係を考えると、「親友とは何かと問われた時、互いの対立や葛藤を経験しながらも、訣別と和解を幾度も繰り返すなかで、徐々に揺るぎのない関係を創りあげていけるような間柄と答えることができただろう。」(土井、2008)。

友人関係を論じる時、その様相や意味のあり方は発達段階により、大きく異なってくる。本研究では高校生2年生を対象に、高校生が該当する、青年期に着目して、友人関係を概観していきたい。様々な先行研究において、友人関係の発達やその意義について、論じられている。

従来型の友人関係といえる知見とは対照的に、現代青年の友人関係が希薄化し、自己の内面を開示し深くかかわるような友人関係を避ける傾向が1980年代半ばころから指摘されるようになってきている(岡田、1995)。

土井(2004)は従来の親友像とは異なる、現代の親友像を示している。現代の子どもにとって、親友という「相手」より、その「関係性」が重要になってきており、お互いの衝突を避けるような、親友像の変化を指摘している。

他方、この友人関係の希薄化論に対して、データによる裏づけがなされておらず、実際はそうではなく、友人関係の捉え方が変容してきているという意見もある。

本研究では、高校生の友人関係の様相を、多面的にみていくこととする。ありのままの様相をとらえ、どのような構造になっているかを検討することを第

1の目的とする。そして、第2の目的はアイデンティティ発達との関連を検討することである。友人関係のどのようなとらえ方がアイデンティティ発達とどのように関連しているかを検討し、アイデンティティ発達を促す友人関係とはどのようなものであるかを明らかにしたい。

研究1

研究1では友人に対する態度を測る尺度を作成した。先行文献より友人関係についてのブレーストローミングを行い、院生4名でのKJ法で、友人関係を捉えるカテゴリ23項目を作成した。質問項目は、「私が、友だちに対して、どういう働きかけをするのか? どう思うのか?」を問うように、整理し、7つの観点から、対友人態度に関する項目として、合計56の項目を作成した。

研究2

目的：高校生の友人関係の様相を分類し、アイデンティティ発達との関連を検討する

方法：質問紙調査

- ①対友人態度尺度(研究1で作成)
56項目、5件法
- ②多次元アイデンティティ発達尺度
24項目、5件法
- ③「卒業後の進路をきめているか」を問う質問紙による調査。2件法

調査校：県立A高等学校 2015.9.24

7クラス 238名

県立B高等学校 2015.10.5

4クラス 156名

結果と考察

①の項目分析を行い、因子分析の結果、人に対する態度や友人関係を「従来型」「一人志向」「モデル型」「気遣い型」「依存型」「つながり型」「友だち希求型」「表層型」「寛容型」の9つの項目に分類した。

②に関しては既存の尺度であるので、下位尺度の内的整合性を確認した後、①と②の関連を検討した。

対友人態度尺度の9因子の中で、男女差で有意なのは、「モデル型」「気遣い型」・「つながり型」・「友だち希求型」・「表層型」の5因子である。表層型以外は女子の方が高かった

男女差が有意だったのは、「コミットメント形成」「広い探求」「深い探求」の3因子であった。女子の方が得点が高かった。

DIDS-Jの5項目と対友人態度尺度の9項目との相関では、「コミットメント形成」では、女子で従来型、モデル型、つながり型で正の有意な相関がみられ、依存型と負の有意な相関がみられた。

「コミットメントとの同一化」では男子では、従来型、モデル型、つながり型で正の有意な相関がみられ、依存型とは負の有意な相関がみられた。女子では従来型、モデル型、つながり型、寛容と正の有意な相関がみられ、依存型とは負の有意な相関がみられた。

「広い探求」では男子は従来型、モデル型、気遣い型で正の有意な相関がみられ、依存型、表層型で負の有意な相関がみられた。女子では従来型、モデル型、つながり型、友だち希求型、寛容型で正の有意な相関がみられた。

「深い探求」では男子では、従来型、モデル型、気遣い型、つながり型で正の有意な相関がみられた。女子は従来型、モデル型、つながり型、寛容型で正の有意な相関がみられた。

「あなたは卒業後の進路を決めていますか？」という進路を問う質問と性差の2要因分散分析では交互作用で有意だったのは「反芻的探求」のみであった。重回帰分析でアイデンティティ発達に寄与する友人関係の特徴を分析した。特記すべきことは、モデル型が、女子でコミットメントとの同一化、コミットメント形成、で正の有意、広い探求では男女とも正の有意となったことである。これは進路選択を迫られる高校生にとって、どんな選択肢があるのかを考える上で、友だちの存在が、あることを示しているだろう。また、女子の広い探求では一人志向と

友だち希求という一見すると、反対要因となる項目が、有意で両立していることが興味深い。一人でいる方が楽である、友だちといるより一人がいいという考え方と、友だちを求め、一緒にいようとする考えが両立する、高校生、特に女子学生の日常は友人がいないことへの不安より友だちと一緒にいなくても、アイデンティティ発達がなされていると考えられる。

アイデンティティ発達と高校生の進路決定・未決定の検討では関連が認められた。高校生が進路を決定しているという心情ではアイデンティティ発達過程でコミットメントを探求する過程と、進路を決める過程が関連しているようである。自分にはどんな進路があるのか、この道を進むにはどんなことを学ぶ必要があるか、などさまざまな葛藤や悩みが進路を決定する際にも出てくる。

学校現場では、進路については、丁寧な指導が心がけられている。アイデンティティ発達の観点からも、早い時期から進路について考えさせ、進路決定の気持ちを持たせることが、大切となるだろう。

引用文献

- 中間玲子(2014) 青年期の自己形成における友人関係の意義 兵庫教育大学研究紀要,44,9-21
- 岡田努(1995)現代大学生の友人関係と自己像友人像に関する考察 教育心理学研究 43 巻 4 号 354-363
- 土井隆義(2004)「『個性』を煽られる子供たち」 岩波ブックレット No.633 岩波書店
- 土井隆義(2008)友だち地獄―「空気を読む」世代のサバイバル ちくま新書

主任指導教員：中間玲子

指導教員：中間玲子